

com. de
みぬま No.5

発行日 2009年6月30日
発行者 みぬまで暮らす会
住 所 さいたま市見沼区蓮沼782-5
NPO法人・くらしとお金の学校内
連絡先 (FAX) 048-687-6277
E-mail jimukyoku@kurakane.org



<報告> **みぬまで暮らす会 設立総会**

5月23日、みぬまで暮らす会の設立総会が七里コミュニティーセンター・和室で開催されました。「配食サービス・つくしんぼ」と「配食サービス・ひまわり」のスタッフの皆さんや地域包括支援センターの小川さん、うどんまつりで料理の腕をふるってくださった鈴木さん等々が参加、総勢18名の総会となり、活発な討議の結果、会の規約を定めることができました。

- ・ **みぬまで暮らす会は、次の事業を行います。**
 - (1) 地域の茶の間事業(ランチとオシャベリの会・茶の間貸し出し等)
 - (2) 講習会・イベント開催事業(親子料理教室・みぬま散歩・コンサート等)
 - (3) 地域ネットワーク促進事業(情報提供・講師派遣・イベント参加等の相互支援)
 - (4) 調査・研究事業(見学会・共助の家「みぬまハウス(仮)」づくりプロジェクト等)
 - (5) 広報事業(情報提供・会報発行等)
- ・ **この会の目的に賛同する人は、会費を添えて入会申込書を提出することにより、誰でも随時、入会することができるものとし、会員の種類は次のとおりとします。**
 - (1) 世 話 人 … この会の運営、企画、活動等に積極的に参加し、協力する会員。
年会費 12,000円 (総会における議決権有り)
 - (2) 正 会 員 … この会の運営、企画、活動等に参加できる会員。
年会費 3,000円 (総会における議決権有り)
 - (3) 購読会員 … この会の会報及び情報の提供を受け、活動等に参加できる会員。
年会費 1,000円 (議決権なし)
- ・ **この会の役員は世話人から選任(定数)され、初年度の役員が次のように就任しました。**
 - (1) 役員(5名以上) … 伊多波安子・江野本啓子・嘉成勝子・田口秀之助・長沼和子
 - (2) 監事(1名以上) … 長澤隆司

なお、「共助の家づくり」では具体的な提案が出され、3年以内に「共助の家・みぬまハウス(仮称)」を実現するために、関係諸団体・個人有志等でさっそくプロジェクトを立ち上げることになりました。(*次頁参照)また、「会報」は、会員内だけでなく、地域のコミュニティペーパーとしての性格も持たせ、参加する団体や個人有志がお互いに情報発信できる紙面とすることとなりました。

80人の歌声が… ♪♪♪

<報告> 5月23日午後、七里コミュニティセンターでの「コンサート&歌声喫茶」は80名もの人々が集い、MAKOTO(重廣誠)さんの六弦ベース演奏から始まりました。ひとつの楽器からあんなにさまざまな音色が飛び出すなんて！そして、アンコールで演奏されたベースでの津軽じょんからに会場は熱くなりました。



第2部は、キララ&ポンパの夫婦デュオで幕が開き、MAKOTOさんのギターと、デイサービスや会食の会で演奏ボランティアをしている千葉さんのアコーディオンの伴奏で80名の大合唱です。懐かしい唱歌、60年代70年代ポップス、ロシア民謡と歌いまくり、楽しい笑い声がホールに響きました。また歌いたいですね！

共助の家「みぬまハウス(仮称)」設立プロジェクトに参加しませんか？

7月から12月まで、「生涯を自宅で豊かに暮らせる仕組みを地域で創り育てる」ための共同学習会を行い、来年1月には共助の家「みぬまハウス」のモデルを作成します。

日 時 : 7月11日(土)午後1時30分～

場 所 : 見沼区役所・多目的室(地域活動室)

参加条件 : みぬまで暮らす会の正会員

参加費 : 無料

《 テーマ 》

7月 「地域の茶の間から始まる」

8月 「私たちの食事づくり」

9月 「無償ボランティアと有償ボランティア」

10月 「託児サービスについて知る」

11月 「地域の自然・歴史を知る」

12月 「建物について知る・家とは」



どくだみ化粧水を作ろう！

どくだみと言うと顔をしかめる方もいるのでは？…

そのどくだみで、自然素材の化粧水を手づくりしましょう！

日 時 : 8月6日(木)12:00～

場 所 : サロンみぬま (さいたま市見沼区蓮沼782-5)

参加費 : 1,000円 (原材料費)

申込先 : Tel. Fax 048-687-6277

* 当日は、ワンコインランチはお休みですが、おむすびを用意します。

* はさみ(どくだみを切るのに使います)を持参してください。

安心して暮らしたい 私たちのまちの情報ガイド 「見沼区 介護・福祉マップ」発行！

2006年おおぜいのボランティアの聞き取り調査から始まったマップづくりでしたが、地図の作製や編集に携わっているうちに、区内の介護保険サービス事業所の廃止・休止や新規参入事業所ができる等、町の福祉現場には急速な変化が起きました。2008年10月以降アンケートによる再調査を行い、データを更新してついに完成！ 地域のみなさまの暮らしに役立つ情報満載のマップに仕上がりました。

ご希望の方は Tel/Fax 048-687-6277 長沼まで
提供価格は、1,000円です。



丸山さんちの畑が、こんなふうに、住宅街の中にある理由？！

ご主人の丸山文隆さんとは昨年11月、「さいたま・まちプラン市民会議」の見沼区の会合で初めてお会いしました。今年4月には私たちのワンコインランチで、蓮沼地区の農業についてお話いただきました。



地域の活動団体の紹介 オーガニック・ハーベスト 丸山

● おもな活動 … 野菜の栽培体験にきませんか？！

「食育、環境、地域コミュニティ、命を育む大切さ」をテーマに野菜の栽培体験イベントを行う。多品目周年栽培を行うことで、3月にはじゃがいもの植え付け、6月にはじゃがいもの収穫、秋にはサツマイモと秋野菜の収穫祭を行っています。

● 設立趣旨 … 農地で地域環境を守り、地域の人々のコミュニティの場となる。

近所のスーパーや直売所で生産物を販売することによって、フードマイレージ(生産物の配送燃料をカットすること)を実現し、Co2排出量を減らし、地球環境を守る、美味しい物を食べながら地球に貢献！を目指しています。

● 丸山文隆さん(46歳)プロフィール …

明治大学農学科緑地工学研究室卒業のち、渋谷の第一園芸就職。平成3年、さいたま市経済部農政課へ転職。グリーンセンターで大宮市の農業を体験し、実践。「さいたま市緑の基本計画」の策定に携わり、「農のあるまちづくり」を実践しています。

開設日：2007年9月 所在地：蓮沼1694 連絡先：048-687-0140

連載 食をめぐる記憶の糸 ① 鈴木進一

うらやましかった臨終間近な人の食い物

一九四六年の秋。私は佐世保湾に浮かぶ引き揚げ船の中にいた。普通なら、どこかの小学校の2年生か1年生の教室で教科書でも開いていたはず。2年か1年というおかしな表現になるのは、前年の4月に満州・牡丹江で小学校に既に入学して、入学即通学どころではなくなってしまうからだ。

兵隊検査抜き父親の招集・入隊、満人(中国人)の襲撃略奪、ソ連軍のソ満国境突破・侵攻と略奪と婦女子陵辱、父親の捕虜シベリア進行、命からがらの山中逃避行等々でアツという間もなくほぼ1年間が過ぎ去った。定住地とてない流浪の日々で、残留孤児になっても不思議ではない日々だった。しかし、筆舌に尽くしがたい母の奮闘と言うか母性本能のおかげでやっと日本に帰り着いたのだった。だから1年生をもう一度やり直すか、年齢からして「進級」させられてしまうのか、「か」がつく曖昧表現にならざるをえないのだ。

ともあれ足をゆつくり伸ばして寝ることもままならない狭さと暑苦しくて薄暗い船の中に私はいた。しかも佐世保入港間もない船の中ではなく、入港して結構日数がたった船の中だ。どれほどの

日数だったかはハッキリ記憶していない。「せつかく日本に帰ってきたのだから早く土の上を歩きたい!」「早く何んでもいいから腹いっぱい食いたい!」「という記憶が主で、本当はそれほどの日数ではなかったのかもしれない。がしかし何日も何週間も留め置かれたような記憶が頭の中を占めている。

船が佐世保に着く前から、何故か人が次々に死んでいった。腸チフスカ。パラチフスという法定伝染病が蔓延していて、少し状況が下火になるまでは上陸させなかつたからではないか?とにかくバタバタという言葉が当てはまるように死人が出た。船の中では人びとの泣く声が引きも切らなかつた。号泣という表現が当てはまる激しい泣き声。が今も耳に残る。肉親が病気で死んでいったからだけでなく、船が佐世保というか日本の陸地が見えだした頃から一斉に、という感じで聞こえた。主として母親たちだった。しかし、我が家の母親は泣いていなかったのがその時は不思議だった。ずーっと後になって気がついたのは、一斉に号泣していた母親たちは、子供を全員は連れ帰ってなかつた方々だったように思う。今日の残留孤児に繋がる事情のある方々だったのかもしれない。

その時はそうしたことには思いが行くはずもない餓餓状態の少年の私には、臨終間近い人に与えられる「澱粉ねつかき」が食べたくて舌なめずりしていた。片栗粉を熱湯で溶いただけなのに、湯気が

ゆらゆら立ち上がり、トロリツヤツヤといかにも甘みがありそうで、「一口食いたい、少々舐めさせてくれ!」で頭の中はいっぱいだった。母や姉に「止めなさい!病気の人の側に行つては気の毒よ!」と叱られたものの臨終間もない人の側へなんとなく少し近づき指をくわえていたものだ。

今考えると他人の死に何も感ずることなく、食い物ばかりに感心が集中した何とさもしくて寂しい少年だったことか、と思う。がしかし同時に、戦争とか訳もわからずに命からがらひたすら逃げまどう日々の中で、すっかり人間としての普通の感覚や心を喪失していたことにゾツとせざるを得ない。

それからどれだけの日数が経過したのかまったく覚えていない、がとにかく下船・上陸することになった。上陸したら腹いっぱい食い物にありつけると待っていた。(つづく)

著者の鈴木進一さんは、元レストランのオーナーで、ワンコインランチのお手伝いを申し出てくださったことがご縁で知り合いました。

その時、満州からの引き上げ体験が食べ物へのこだわりとなり、《食》を一生の仕事とするキツカケになったと話されました。

鈴木さんの戦中戦後の体験を書いていただくとになりました。